

Sense and Sensibility に関する一考察

——女性たちの選択——

井上麻美

序

Jane Austen (1775-1817) の *Sense and Sensibility* (1811) には、対照的な性格と価値観を持つ2人のヒロイン Elinor Dashwood と Marianne Dashwood が登場し、彼女たちは様々な人々と関わっていく中で成長し、伴侶を見つける。これはごくありふれた恋愛小説のようであるが、そこには当時の女性の置かれた社会的背景が見え隠れする。Austen が属した上層中産階級の女性たちは、年頃になると自分を養ってくれる相手と結婚するか、さもなければガヴァネス（住み込みの家庭教師）などの職に就くかくらいしか道がなかった。仮にガヴァネスなどの職に就いても待遇は悪く、女性の社会進出などは望めなかった。つまり食べていくためには結婚することが望ましい世の中であった。

この作品の女性たちは、結婚相手を得ようとする場合に、様々な試練を与えられ選択を迫られるが、その際彼女たちは金銭問題を無視することはできない。そしてそんな彼女たちの行動や考えを作者は諷刺する。しかし作者が属する階級の女性たちにとって結婚における金銭問題はかなり重要なものであったようだ。ではこの時代の女性たちにとって金銭はどのような意味を持っていたのだろうか。本論では、18世紀末から19世紀初頭にかけての女性たち、特に上層中産階級の女性たちがどのような結婚観を持っていたかを検討し、当時の女性たちの社会観や人間観を見ていきたい。

第1章

Sense and Sensibility において結婚する際に何を重視するかは大別すれば二つに別れる。つまり主に相手の人間性を重視する女性と、相手の人間性よりもその人の地位や財産を重視する女性とに分けられる。ここでは前者としてヒロインの一人である Elinor Dashwood

を、後者に Elinor の恋敵である Lucy Steele を取り上げ、この時代の女性たちにとって結婚における財産の占める比重を、彼女たちを取り巻く環境や時代背景などを考慮に入れながら考察していこうと思う。

まず二人のそれぞれの特徴を見ていきたい。彼女たちは二人とも“sense”を持つ人として紹介されている。しかし二人の持つ“sense”の意味内容は本質的な違いがある。Elinor は、「しっかりとした理解力と冷静な判断力」(6)を持ち、「情愛が深く」(6)強い感情の持ち主であるが、何事においても「自制」を働かせ周りの状況をよく観察して行動する女性である。一方、「無知で無教養な」(127) Lucy Steele は Elinor 同様に、他者への心くばりや礼儀を忘れはしないが、その裏には常に自分の利益に繋げようとする計算が見え隠れしている。つまり誠実さに欠けているのである。Lucy は Lady Middleton の子供たちの可愛らしさを褒めたり、Lady Middleton のドレスに感嘆してみせたりして自分の利益になりそうな人に対しては常に如才なく行動する。彼女のそのような媚びへつらいの行動を具体的に描くことによって Austen は Lucy を諷刺している。

Elinor と Lucy の二人が愛する男性 Edward Ferrars は、財産家の長男である。彼は風采や物腰の点で魅力に欠けているし、人見知りも激しいが、その裏には心根の優しさが見られ、欲というものが無い穏やかな紳士である。Elinor は彼の想像力の豊かさや観察眼の正しさ、表情の優しさ、彼とじっくり話していくと見えてくる人柄の良さに心惹かれていく。Lucy はそういった彼の人柄ではなく、彼のバックグラウンドを愛する。一貫して Elinor は彼の人柄を重視するが、Lucy は財産家の跡取り息子である Edward を重視する。したがって、後に Edward と Lucy の秘密の婚約が彼の母親に知られ、Edward が勘当されて財産相続の権利を剝奪されると、Lucy は財産相続の権利を与えられた弟 Robert と結婚してしまう。このことから彼女

にとって財産がいかに重要なものであるか、そして彼女がいかに人間性を無視しているかが見て取れる。

第 2 章

Elinor と Edward との交際には一つ問題があった。それは両者の間の財産の違いである。彼らが愛し合っていることは周知のことであったが、このことに対する彼らの母親の反応は対照的であった。Elinor の母 Dashwood 夫人は、Edward が財産家の長男だということよりも、彼自身の人柄の良さと何よりも本人同士が深く愛し合っている事実を喜び、“It was contrary to every doctrine of her’s that difference of fortune should keep any couple asunder who were attracted by resemblance of disposition.” (15) とあるように、財産の相違で愛し合う二人を引き裂くことを良しとしない考えである。

一方、Edward の母 Ferrars 夫人や姉 Fanny Dashwood は、Edward には地位も財産もある女性との結婚を望んでいるので、Elinor との結婚には反対する。ここで興味深いのは Dashwood 夫人と Ferrars 夫人の金銭に対する考え方がまるで対照的な点である。Dashwood 夫人はロマンティックな性質で金銭感覚に欠ける女性で、引っ越し先の物件探しをするのも、家計の管理をするのも、実質的には長女の Elinor であった。Dashwood 夫人が相手のバックグラウンドよりもお互いが愛し合っていればそれでいいという考えを持つのに対して、Ferrars 夫人は息子を世間的に出世させ、お金持ちの女性と結婚させることを絶対と見る考えの人である。当然、Ferrars 夫人は持参金が千ポンドしかない Elinor のことを認めるわけもなく、彼女に対して冷たい態度を取り続ける。一方、何とか Ferrars 夫人に気に入られようと媚びへつらう Lucy を Elinor へのあてつけで優遇する。ところが Lucy は4年も前に Edward と秘密の婚約をしていた。そうとも知らずに Elinor への嫌がらせのために Lucy に優しくする Ferrars 夫人の態度は非常に滑稽に映る。後にその秘密の婚約を知ることになり、Lucy は文無しなのだから当然 Ferrars 夫人の彼女への態度は、これまでとは一変する。この夫人の金銭の有無を基準に態度を変える姿を描くことによって、Austen は Ferrars 夫人が非常に狭量な人物であることを示している。

Lucy がなぜ婚約を秘密にしていたか。それは財産がないからである。ここで彼女たちの財政事情を把握しておきたい。この小説は Dashwood 一族の土地の話

から財産分与というかなり現実的な金銭問題から始まる。一族の最後の当主は独身であったので、財産分与のために甥の Henry Dashwood を屋敷へ迎え入れる。Henry には先妻との間に一人息子の John、後妻との間に3人の娘があった。John には亡母の財産があり、結婚によってさらに財産を増やしていた。一方、娘たちに関して言えば、母親に財産がない上に、父親の Henry にも7千ポンドの財産しかなかったので、彼は当主が彼女たちとできるだけ財産を分与してくれることを望んだが、当主の遺言で遺産は John とその息子に与えられることになり、娘たちは千ポンドずつ貰うだけだった。Henry には地所を担保に借金したり、立ち木を売ってお金を得るような権限は与えられていなかった。そのため妻と娘たちに何もしてやることができなかつた彼は、彼女たちのことが気掛かりで、臨終の際に John に彼女たちへの援助を頼む。

John は最初異母妹たちに一人千ポンドずつ与えることにするが、「心が狭く利己的」(5) な妻 Fanny が、夫の方針に対して異議を唱え始める。妻の意見に流されるままの夫は5百ポンドずつにしようと言うが、Fanny は半分しか血が繋がっていないのにそこまでする必要はないと言い放つ。では義母に何か年金のようなものでもと言うと、もし未亡人が長生きしたらかえって損をするともた Fanny は反対する。それで結局 John は金銭的援助はせずに引っ越しの時などに手伝いをするとか季節の贈り物をしようという結論に達する。この John と Fanny との会話から、作者は彼らの金銭に固執する俗物根性をさらけ出して諷刺している。結局残された親子4人は、父の遺産7千ポンドと、当主から3人の姉妹にそれぞれ千ポンドずつ贈られた3千ポンドとを合計した総額1万ポンドの年利5パーセント、つまり年5百ポンドで生活しなければならない状態になる。当時のジェントリー階級の年間生活費は平均約7百ポンドから1千ポンドであった(ブラウン24) ことから考えると、年500ポンドでの生活はかなり苦しいものである。

Lucy に至っては Elinor よりも親族関係でも財産の点でも明らかに劣る。従って Ferrars 夫人や Fanny にすれば、財産家の長男 Edward の相手としては論外なのである。何も持たない Lucy は、Edward への愛情が本当は冷めていても、Ferrars 家の跡継ぎの彼を決して手放そうとはしない。Elinor と Edward との仲に気づいた彼女は、Elinor に以下のようなことを言って牽制をかける。

“Edward’s love for me, . . . has been pretty well put to the test, by our long, very long absence since we were first engaged, and it has stood the trial so well, that I should be unpardonable to doubt it now. I can safely say that he has never gave me one moment’s alarm on that account from the first.” (147)

しかし、Lucy の Edward に対する思いは彼の人間性ではなく、バックグラウンドに向けられているのである。二人の秘密の婚約が周りにばれてしまった時、Ferrars 夫人は激怒して、Edward に何とかして Lucy との婚約を破棄するように説得を試みる。けれども彼は首を縦に振らなかったで、夫人は彼を勘当し跡継ぎの権利を剥奪してしまう。Lucy は、その結果跡継ぎの権利を与えられた次男の Robert とさっさと結婚してしまう。このことで Robert も一時的に勘当されるが、Lucy のずる賢い機転で Ferrars 夫人の許しを得ることができ、最後には Ferrars 家の女主人となる。

人間性よりも、Robert のバックグラウンドを重視した結婚を選んだ Lucy は、人でなしの女性のように映る。だが当時、身分も高くなく持参金もない娘が自分を養ってくれる相手を得るために、このような手段に出たとしても一概に責められるものではないと思われる。

では Elinor は財産についてどのように考えているのだろうか。富と幸せの関係について Marianne との以下のような会話がある。

“What have wealth or to do with happiness?”

“Grandeur has but little,” said Elinor, “but wealth has much to do with it.”

“Elinor, for shame!” said Marianne; “money can only give happiness where there is nothing else to give it. Beyond a competence, it can afford no real satisfaction, as far as mere self is concerned.”

“Perhaps,” said Elinor, smiling, “we may come to the same point. *Your* competence and *my* wealth are very much alike, I dare say; and without them, as the world goes now, we shall both agree that every kind of external comfort must be wanting. . . . Come, what is your competence?”

“About eighteen hundred or two thousand a year; not more than *that*.”

Elinor laughed, “Two thousand a year! *One* is my wealth! . . .” (91)

Marianne はロマンティックな女性で、富は人が生活していく上で必要だと Elinor が言ったのに対して、はしたないと言って Elinor をたしなめる。しかし Marianne も、生活する上である程度の資産は必要であることについては Elinor と意見が一致している。しかしその金額には差がある。Marianne はある程度お金があればそれ以上はいらないと言うが、蓋を開けてみれば彼女の場合 1800 ポンドから 2 千ポンドで、Elinor の思う金額より大きかったのである。要するに彼女はきれいごとを言っているだけで、現実が見えていない。一方、Marianne よりも現実的な Elinor は、人が生きていくためには「経済」は切り離せないものであることをしっかり認識していた。そして Austen もそのことを十分に心得て当時の女性たちのリアルな心情を描いているのである。

第 3 章

では金銭に左右される行動をするのは女性たちだけだろうか。この作品に登場する男性たちにも触れておきたい。彼らのほとんどがジェントリー、つまり紳士階級の人達である。Jane Austen は「自分では働かず人々の仕事を監督し、その一方で子供を結婚させるために策略を練ったり、他人の家を訪問したり、自分の社会的地位を上げる方法を考えたりすることに憂き身をやつす」(プール 234-35) 男性をしばしば描いている。

まず Marianne の恋人 Willoughby について触れてみたい。彼は男らしい美貌と並々ならぬ優雅さを持っており、まるで Marianne のお気に入りの物語に登場するヒーローのような青年である。加えて彼は羽振りも良かった。彼の不動産収入は年約 6, 7 千ポンドぐらいと見積られるが、その収入に見合わない生活をしている。彼は後見人で親類の Smith 夫人の財産をあてにしている。ある日、遊び相手だった女性を妊娠させて棄てたことを夫人に知られてしまう。激怒した夫人は彼に絶縁状を突き付け、彼に財産は渡さないと言い渡す。そのため貧乏を恐れた彼は、愛情よりも持参金付きの結婚を選び Marianne を棄てる。

次に Ferrars 家の長男 Edward と、Marianne に想いを寄せている Brandon 大佐について見ていきたい。ここで当時の長男の権利について述べておこう。当時のイギリスの富と地位と権力の基礎は土地にあった。そして彼らの関心事はその広大な土地を無傷で子孫に残していくことであり、それによって長年に渡って彼

らの影響力と富を維持し続けることであった。その方法として、長子相続権があった。つまり土地は、全ての子供に分割して与えられるのではなく、長男だけに与えられるのである(プール 125)。そのため、下の弟たちは職に就くことになる。そのとき軍隊に入るか聖職につくかの選択が多かった。そして当の Edward はというと、出世して欲しいと家族が望んでいるのは裏腹に、その消極的な性格と出世欲のなさから、期待に答えることは出来なかった。彼は長男で将来財産を受け継ぐ身なので、職業に就く必要はないということで大学へ行き、ぶらぶらしている状態であった。家族の思惑と Edward の思いの相違が、彼を中途半端な状態に置くことになる。一方、Brandon 大佐は次男で軍隊に属しているが、彼の兄が死んだことで一族の財産を相続するに至った。彼は年2千ポンドの収入がある資産家だが、彼も Edward 同様、財産の有無で人を見るようなことはしない。

この二人とは反対に、財産のあるなしで人を見る目を変えたり、何でもかんでも金銭に結び付けて考える男性もいる。Elinor と Marianne の異母兄 John である。彼は Brandon 大佐が資産家だと知るやいなや目の色を変えて、Elinor に彼との結婚を勧めたり、Willoughby に裏切られやつれている Marianne の様子を見て、体調を心配するよりも花嫁としての価値を心配し、次の引用文にあるように彼女の花の盛りは短いものだった、今ではどんなに多く見積もっても年5、6百ポンド以上の収入のある男性と結婚できるかどうか疑問だとまで言う。

“... At her time of life, any thing of an illness destroys the bloom for ever! Her's has been a very short one! She was as handsome a girl last September, as any I ever saw; and as likely to attract the men. . . . I question whether Marianne now, will marry a man worth more than five or six hundred a year, at the utmost, . . .” (227)

このことからわかるように、John は人をもお金に変えて評価する人物である。そして作者は、John の金銭崇拜的なものの見方を通して、彼の「精神的枯渇をあばきだすと同時に、彼の冷徹きわまりない言葉のなかに、19世紀初頭の持参金が少ない未婚女性たちの屈辱的立場を端的に描写している」(都留 86)のである。

結 論

Austen の時代の女性たちにとって結婚における金銭問題はかなり重要であることを示してきた。Austen が属した上層中産階級の女性たちにとっては、お金があって、社会的地位も確立できる良縁が必要であった。つまり彼女たちにとって結婚とは自分の一生の生活がかかったものだった。生涯独身であった作者自身も、結婚しないことの不安定さを“Single Women have a dreadful propensity for being poor—which is one very strong argument in favour of Matrimony,” (Chapman 483) と姪に宛てた手紙の中で述べている。

Elinor は幸せに生活するにはある程度の富が必要だと言っている。Edward と結婚するにしても、彼の2千ポンドの財産と牧師禄の収入年2百ポンドに Elinor の持参金千ポンドとを合わせ、年350ポンドで生活することはできない。そこで Elinor は、そもそも Ferrars 夫人の機嫌を損ねたのは確かなのだから謝罪すべきだと Edward に勧める。それで Edward は夫人のもとへ赴き、Lucy との軽率な婚約のことを謝罪し、なおかつ Elinor との結婚を認めてもらい勘当を解いてもらう。そして夫人は Fanny に与えたのと同じ1万ポンドを Edward に相続させる。こうして Elinor と Edward は生活に必要なそこそこの収入年850ポンドを確保する。

一方、女性の社会的立場が弱い時代において Lucy は、Robert と結婚することによって、Ferrars 家の女主人になった。金銭に左右されるのは何も Lucy だけではない。それは男性たちも同様であった。Elinor たちの異母兄 John は人をもお金に換算して評価してしまうし、Willoughby は、男性判 Lucy である。

Austen が持つ理想の結婚について、McMaster は“*She (Austen) maintained a high ideal of a marriage based on mutual love and esteem, . . .*” (Grey 287) と言っている。愛ある結婚こそが幸せだと Austen は言うが、その一方で彼女は結婚がいつもそう理想通りにはいかないことも知っていた。彼女の作品には常にお金の話がついてまわる。その時お金に対する人々の言動は様々であるが、その対応の仕方によって「個人の価値が測られる試金石」(樋口 97)となる。Elinor とは違って Lucy は、物語に登場してから終わりまでその言動の何もかもが作者 Jane Austen の諷刺的になっている。しかし、一方でこれが働いて収入を得ることのできないこの当時の、女性たちの現実の姿なのだとい

うことを Austen はありのままに示している。

引証資料

- Austen, Jane. *Sense and Sensibility. The Novels of Jane Austen.* ed. R. W. Chapman. Vol. 1. Oxford: Oxford U. P., 1988 (本論文における Jane Austen の作品からの引用はこのテキストによる).
- *Jane Austen's Letters to her sister Cassandra and others*, Ed. R. W. Chapman, (OUP, 1952)
- McMaster, Juliet. "Love and Marriage." *The Jane Austen Com-*

panion, Ed. J. David Grey. (Macmillan Publishing Company, 1986)

- J. P. ブラウン著, 松村晶家訳『十九世紀イギリスの小説と社会事情』英宝社, 昭和 62 年
- ダニエル・ブール著, 片岡 信訳『19世紀ロンドンはどんな匂いがしたのだろうか』青土社, 1997。
- 都留信夫編著『イギリス近代小説の誕生—十八世紀とジェイン・オースティン—』ミネルヴァ書房, 1995。
- 樋口欣三『ジェーン・オースティンの文学』英宝社, 昭和 59 年。